中里高校ねぶた体験記

ねぶた制作から立体造形を学ぶ

中里高校では、ねぶたの制作に生徒たちが挑戦しています。生徒が手掛けているのは、なかどまりまつりで運行するねぶたの送り絵と、メバルの形をしたねぶた(通称メバネブ)です。ねぶた師の竹浪比呂央さん(青森市)が、針金で骨組みを作り、それ以降の工程は生徒が挑戦しました。

送り絵のデザインを担当しているのは、美術部部長の佐々木彩乃さんです。「初めての経験で、どうなるか想像もつかなかった。大変だけれども、制作作業は楽しい。」と話していました。デザインは、教員や友人に相談して決めたそうです。ポイントは、アクセントになる大きなものを手前になるように配置したところだそうです。送り絵は、佐々木さんのほか、有志の人たちが連日集まって送り絵完成にこぎつけました。

竹浪さんは、何度かねぶたの出来映えを見に中里高校を訪れていました。竹浪さんは、「『ぼかし』を覚えたばかりだと、何でもぼかしたくなるが、中里高校の生徒たちは全体を考えながら技法を使っている。」と感心していました。

竹浪さんから技法を学ぶ様子

「メバネブ」ができるまで

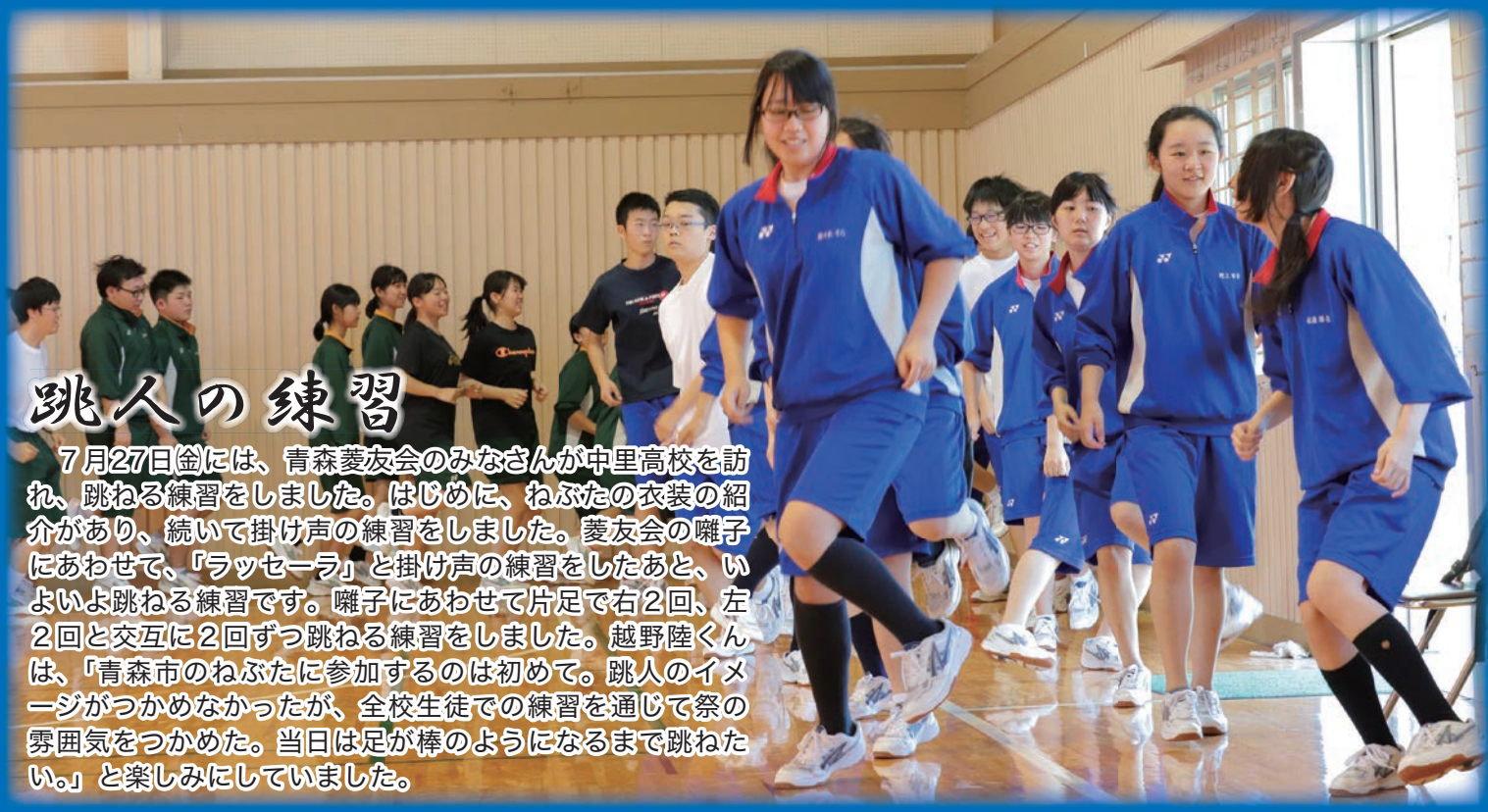
生徒は、４つの制作過程を手掛けました。

【紙貼り】
針金の骨組み１区画ごとに、のりで紙を貼る。指先や歯ブラシにつけたのりを針金に塗り、紙を貼る。紙を貼るときは、引っ張りすぎると余計なシワが出来てしまう。区画ごとに紙の形や大きさが異なるので、難しい作業である。

【書き割り（墨書き）】
まっ白なねぶたに、目やえら、ヒレなどを書いていく。メバネブに個性が表れてくる。平らな面がほとんど無く、筆遣いが難しい。

【ろう書き】
表現にあわせて、パラフィン（ろう）を溶かし、縁取りをする。ろう書きをした所は明るく光っているように見える。色の境目でにじみを防ぐ効果もある。メバルのウロコはろう書きで表現している。

【色付け（彩色）】
筆で色をつける。色付けにあたって、竹浪さんから「にじみ」というグラデーションをつける技法を教わっている。メバネブに個性が強く表れる工程である。



跳人の練習

７月27日㈮には、青森菱友会のみなさんが中里高校を訪れ、跳ねる練習をしました。はじめに、ねぶたの衣装の紹介があり、続いて掛け声の練習をしました。菱友会の囃子にあわせて、「ラッセーラ」と掛け声の練習をしたあと、いよいよ跳ねる練習です。囃子にあわせて片足で右２回、左２回と交互に２回ずつ跳ねる練習をしました。越野陸くんは、「青森市のねぶたに参加するのは初めて。跳人のイメージがつかめなかったが、全校生徒での練習を通じて祭の雰囲気をつかめた。当日は足が棒のようになるまで跳ねたい。」と楽しみにしていました。

中里高校ねぶたの本体が完成しました

竹浪さんが制作する中里高校ねぶたの本体が完成しました。題材は中里城主と推定される荒關又二郎です。このねぶたは、８月11日㈯のなかどまりまつりでお披露目です。

武田源左衛門定清のお墓にお参りしました

７月31日㈫に弘前市禅林街の海蔵寺へ濱舘町長を始め、櫻田弘前市長、竹浪さん、菱友会林実行委員長の４人で菱友会のねぶたの題材となった武田源左衛門定清のお墓にお参りしました。